

読切り連載

アカンタレ勘太 <1>

作 いのしゅうじ

にゅうがく

おまわりさん帽子

勘太が小学校に入学した。

おじいさんがとてもよろこび、おいわいに学生帽をおくってくれた。

勘太はこの帽子をきりっとかぶり、おかあさんにつれられて学校の門をくぐる。金次郎さんがむかえてくれた。

金次郎さんは、たきぎを背にしよって歩きながら本をよむ二宮金次郎の像のこと。勘太は帽

子をぬいで、金次郎さんにぴよこんとおじぎした。もういちど帽子をかぶったとき、そばにいた二年生の勝也がはしゃぎたてた。

「アカンタレ勘太、おまわりさん帽子」

勘太はなんのことかわからず、ぼーっとしている。

すると、勘太とおなじ新入の子ら4、5人がいっしょになってふざける。

「アカンタレ勘太、おまわりさん帽子」

みんながかぶっている帽子は波だっているけど、勘太のはてっぺんが平だ。ときおり巡回にくるおまわりさんの帽子のようなので、みんなが



わらったのだ。
勘太は三つになっても歩けなかった。ほとんどの子は1歳半くらいには歩きだす。3歳にもなれば、自転車ではしりまわっている子もいるというのに、勘

太はよっちらよっちらとはいはいしている。

おかあさんは買い物にいくとき、いつも勘太をおんぶする。と、近所のおばさんたちが、「あのこ、アカンタレやねえ」

と、かげぐちをした。あっという間にうわさが広がり、悪ガキどもから勘太にアカンタレをつけて「アカンタレ勘太」とよばれるようになった。

おじいさんは、「この子は一生歩けんやろ。かくごしておけ」

と、なんだか勘太のおかあさんにいい放ったが、おかあさんはそのつど、きりっと言いかえした。

「わたしが歩けるようにします」

勘太がひよっこり歩きはじめたのは3歳と3カ月くらいのころだ。

お兄さんの淳吉がつくえの上で飛行機のもけいを作っているとき、勘太がいすにつかまり立ちした。

そのままひよろひよろと二、三歩あるいているのを、ハサミをさがしていた淳吉が気づき、大声をあげた。

「勘太、歩いてる」

台所にいたおかあさんがとんできた。

「カンちゃん、やったね」

勘太をだきあげるおかあさん。涙をぼろぼろながしてる。

あくる日、となりまちにいるおじいさんがやってきて、勘太にやくそくした。

「学校に上がるとき、帽子を買うたる」

「帽子なんか……」

とけげんそうなおかあさんに、「ふつうのとちがう。りっぱな大人がかぶる。そんな帽子や」

おじいさんは大阪駅のえらい駅員さんにあこがれていた。いくつもの赤や金色の線がついた帽子をかぶっているからだ。

さすがに勘太におくった帽子に線はないけど、おじいさんの気分は「大阪駅の駅員帽」。

勘太の町から大阪駅まで電車で1時間半もかかる。ほとんどの子は大阪駅に行ったことがない。勘太の帽子を見て、おまわりさんの帽子とお

もうのもむりはない。

勘太のおかあさんは子どもたちをにらみつけた。

「この帽子はりっぱな帽子です」

勝也もまけてはいない。

「アカンタレ勘太には似合わん」

「この帽子をかぶったらアカンタレでなくなるの」

ナイフの先みたいなさるとい声に、勝也はひるんだ。

「負けたらあかんよ」

おかあさんにそういわれても、勘太は肩をすぼめてぶるぶるふるえていた。

レンゲのかんむり

イツ子せんせいがしゅっせきをとりはじめた。「名前をよばれたら、ハーイと元気よくこたえるのよ」

勘太の席はさいぜんれつ。イツ子せんせいは勘太のつくえの前にたっている。

せんせいは背がひくいのに、勘太が首をぐっとそらさないと顔はみえない。あおぎ見ると、まるい顔からやさしい笑みがこぼれている。

(こないだもこんな顔してはった)

勘太は1週間ほど前のできごとを思いだした。おかあさんの買いものについて行くとちゅう

だった。タバコ屋のわきのポストにイツ子せんせいのはがきを入れようとしているのを、おかあさんが気づいた。

「あら、宮井先生、むすこの勘太。こんど入学しますねん」

宮井先生。名まえは衣津子。先生になってまだ1年。いつもニコニコ顔だ。みんな「イツ子せんせい」とよんでいる。

「ああ、アカン……勘太くんね。勘太くんのクラスの担任になるのよ」

イツ子せんせいになれなれしくしていた勘太のお母さんは、たいどをガラツとかえた。

「アカンタレですけど、よろしくお願いします」

と、頭を九十度いじょう下げる。

「勘太、ちゃんとあいさつしなさい」

「……」

カンタです、と言おうとしたが、声のでない。勘太ののどが、北極にほうりだされたみたいにおりついてしまってる。

「すいません。しつけをきちんとしてなくて」

ぺこぺこ頭をさげるおかあさんの後ろに勘太はかくれた。

「井田勘太くん」

イツ子せんせいがなまえをよんだ。教室じゅうにひびく大きな声だ。そろっと勘太は手をあげ



教室の後ろにいたおかあさんが、
「勘太、ハイといいなさい」
と声をはりあげる。
勘太が声をしぼりだした。

「おしっこ」
わーっとみんなが笑った。おかあさんは顔を
まっかにしてその場にしゃがみこんでしまった。
「お便所にいきたかったのね。いいわよ、いって
らっしゃい」

というイッ子せんせいも出席簿で笑いをかく
している。

勘太は自分でもなぜ「おしっこ」と口ばした
のかわからない。声をだそうとしたら、どうい
うわけかおしっこがもれそうになった。

校舎はコの字型になっていて、勘太の教室は

た。でも「ハイ」
がのどからでて
こない。のどの
奥がぴしゃっと
戸じまりしてる。
ウンウンうなっ
てるだけ。
いまにも泣きだ
しそう。
「勘太くん。いな
いの？」

門の左。便所は門の右がわだ。講堂で入学式をお
えたばかりだから、勘太は便所のばしょをしらな
い。

勘太はいつのまにか門のそとに出ていた。

まわりはいちめん田んぼ。どの田んぼにもレン
ゲソウが植えられていて、レンゲの花がひらひら
と風にそよいでいる。

勘太は赤紫のレンゲのせかいにふらふらっと
入りこんだ。

「どうしたのかしら」

いつまでたっても勘太がかえってこないの
で、イッ子せんせいは便所をのぞきにいった。

「勘太くん、どこにもいない」

大さわぎになった。先生もお母さんたちも手
わけして探しまわる。

「レンゲ畑かもしれん」

とつげたのは勘太と幼稚園がいっしょだった
哲則だ。20分ほどして、勘太はみつかった。

勘太はレンゲソウをつんでいた。

「何するの？」

イッ子せんせいに、勘太は鼻水をすすりあげ、
ぽそとこたえた。

「レンゲのかんむりを作るねん」

「なんのため？」

「イッ子せんせいにあげるんや」

読切り連載

アカンタレ勘太 <2>

作 いの しゅうじ

えんそく

おすしのお弁当



「えんそく、えんそく——」

勘太はリュクサックをせおって、家のなかを歩きまわっている。

1年生の春のえんそくは、毎年となりのH町のゆうえんちと決まっている。

入学して1カ月あまりがたったころ、イッ子せんせいは黒板に大きな字で、

「えんそく」

とかいた。

「いいですか、今度のすいようびがえんそくですよ」

せんせいに言われなくてもみんな知っている。

「ハイ」

おもいきり元気なへんじが教室中にひびいた。

勘太が家にかえるとリュクサックが居間の



ちゃぶだいにおかれていた。おかあさんが買ってきたばかりのま新しいリュック。左右のポケットに青い線がはいっている。

勘太はさっそくせおってみた。背中にリュックがやわらかくふれる。つんとすましてるランドセルとはおおちがい。

勘太は3げん向こうのなのはな畑にでかけた。あぜにすわり、リュックからおべんとうを出すしぐさをする。むねがはじけそう。

♪早くこいこい、えんそくが

「お正月」の童謡をかえうたにして口ずさんだ。

えんそくの前の日。学校からかえると勘太はおかあさんの買いものにつきっきり。おべんとうに巻きずしをつくったげる、と約束してくれ

たのだ。

かんぶつ屋さんでノリやかんぴょう、北島のやおやさんではミツバ、肉屋さんで卵――。

ゆうしょくを終えると、おかあさんは巻きずしづくりにかかった。

「おべんとうで恥かきとうないねん。じょうずにつくってや」

「心配せんでええ、だれよりもおいしそうなおすしができるさかい」

といいながら、にぎったごはんを巻きずしの上にのぼして、くるくるっと巻くおかあさん。そのすばやい手さばき。勘太は目をかっとひらいて見つめている。

えんそくの日がやってきた。

電車とバスをのりついでゆうえんちへ。イッ子せんせいを先頭にゲートをくぐる。

勘太の目は飛行塔をさがしていた。塔のてっぺんからつり下げられた飛行機がぐるぐる回る飛行塔。そのそばの広場で食事をするはずだ。

お兄さんの淳吉が、

「飛行機見ながらべんとう食べることになってる」

とおしえてくれたのだ。

「きれいな小川がある」

淳吉のことばを勘太は頭にいれた。

園内をうろうろしているうちにお昼のじかん



になっ
た。
やはり
飛行塔の
そばの芝
生の広場
だった。
淳吉のい
うとお
り、ほほ
まん中を
小川がな

がれている。はば3メートル、深さは50センチくらい。勘太は川のそばにすわった。

巻きずしは竹の皮につつまれている。ひざにのせて、竹のひもをほどいたときだった。岸からムカデがはいでてきた。

「ギャー」

勘太はぱっと立ちあがった。巻きずしはひざから竹のつつみごと小川におちた。

「あ、しまった」

と大声をあげたのはイッ子せんせいだ。川岸にいる勘太を見て、

「こっちに来なさい」

と言おうとしたやさきだった。

おすしは竹の皮の舟にのって、ゆらゆらとな

がれている。

「ぼくのおすし、およいでる」

勘太は川にはいろうとした。

「だめ、はいつては」

イッコせんせいのきつとすどい声をとんだ。

せんせいは、菓子パンの一つを勘太にあたえた。巻き貝のかたちのパンだった。なかにチョコレートがつまっている。ほおぼると、やわらかなチョコレートが口いっぱいにひろがった。

そのふわっとしたあまい味を勘太はいつまでも忘れなかった。

レーシングカー

イッ子せんせいにもらったパンを勘太がたべおえたとき、テッチャンが近よってきた。

だれにでも話しかけることができる哲則。じょうだんを言ってけらけらと笑う明るいせいがかくだ。入学して1週間もたたないうちに、みんなに「テッチャン」とよばれるようになっていた。

テッチャンの家は勘太の家の近く。ようちえんがいっしょだから、入学前からのともだちだ。テッチャンが勘太の家になんどもあそびに来ているので、勘太のおかあさんもテッチャンをよ



く知っている。

「べんとう落としたこと、おかあさんに黙っ
といてや」

「ぼくは口がかたいんや」

テッチャンは口にチャックするまねをした。

「あとでレーシングカーのりに行こ」

食事のあと、一つだけ乗り物にのれるのが決
まり。おべんとうのまえ、テッチャんにさそわ
れて勘太はメリーゴーランドとモーターボート
にのった。メリーゴーランドは回転木馬。モ
ーターボートは池の中をぐるぐるまわる回転ボ
ート。テッチャンはカタカタ名の回転ものがす
きなのだ。

レーシングカーはこのゆうえんちの一番にん
き。よそにないゴーカーをと、さいきん、先
がとがった最新型車を取りいれた。こども新聞
に「アメリカ生まれのスマートな車」ととり上
げられたので、にちようびには長い行列ができ

るそうだ。

レース場はちょっけい20メートルの円形。
6台の車があり、右まわりで3周する。車は、
はば50センチ、長さ1・5メートルくらい。

よその小学校の子ども4、5人が並んでいた。
じゅんばんを待つ間、テッチャンは、
「ぼくはのったことあるねん。ぼくの後につ
てくるんやで」

と、さもせんばいづら。

「そやけど心配や。おべんとうのことがあるよ
って」

テッチャンのよけいな一言がいけなかった。
勘太は「運転ようせん」といえず、「だいじょ
うぶ」とむねを張ってみせた。

テッチャンがのった車がさーっと走りだ
した。次の車がとうちゃく。勘太はかかりのお兄
さんにうながされて車にのった。

はっしゃしない。4、5秒たってお兄さんは
あわてた。

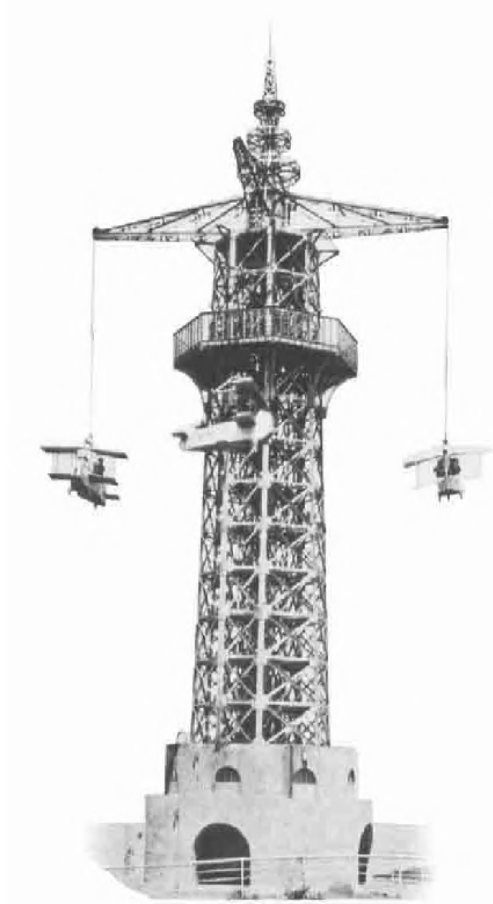
「ペダルに足のせるんや」

「そうそう、ペダルふんでごらん」

車がそろっとうごいた。5、6メートルほど
走るとよたよたしだした。

「ハンドルもつんや」

お兄さんの大きな声がひびいた。じゅんばん
待ちをしていた同じクラスの勝や隆三らが「な



にごとか」と
レース場をの
ぞきこむ。

勘太は「ハ
ンドル」がな
んのことかわ
からない。ど
うすればいい
のか、頭はパ
ニック、足は
こちこち。ペ
ダルだけはふ
みつつづけて
いる。

車はもたも
たしながらす
すんだ。

「ハンドル右
にきれ」
お兄さんの叫
びと、車がレ

ース場の壁にぶつかるのは同時だった。

「グワー」

というにぶい音。お兄さんがすっとんできた。

壁にはゴム板がはりつけてある。車にきずが
ないことがわかって、ほっとした顔のお兄さん。

車にのり、勘太の横にわりこんで運転をはじめ
る。

「アカンタレ勘太、アカンタレ勘太」

勝と隆三が声を合わせてはやす。テっちゃん
も気づいて車をとめ、ふりかえって見ている。

お兄さんは3周はしってくれた。「1周だけ
でええからおろして」とも言えず、勘太はただ
うつむいている。

その日の夕ごはんのとき。おかあさんがうす
笑いをうかべた。

「勘太、おすしどうやった」

「おいしかった」

「川でびしょぬれになったん、食べたんやね」

「ムカデがわるいねん」

「レーシングカーもムカデおったんか」

といいながら、おかあさんは腹をかかえている。

次号に続く

